母子相互作用の社会小児科学的検討

―乳幼児期の委託育児の発達に及ぼす影響の検討―

加藤　翠（日本女子大学）
巷野悟郎（都立府中病院）
大塚昭二（東京家政学院大学）
松波昭夫（松波小児科）
田辺陽子（日本女子大学）

緒　言

５５年度には夜間保育という特殊な保育形態の実態を調査し，このような特殊は委託育児は子どもによくない影響があるのではないかを検討した。

５６年度には委託育児についての社会の認識や評価を調査した。

その結果社会一般の人々は，三歳未満児は家庭で母親によって世話されるのが好ましいと考え，母親が働いている場合でも家庭で祖父母その他によって育児が代替されることが好ましいと考えていることが知られたわけである。そして３才以上になったら，母親が働いている場合も含めて，保育所よりも幼稚園で教育を受けさせるのが好ましいと受けとめていたのである。三歳未満児の保育所保育は，母子の愛情的結合が稀薄になり，母親としての自覚がうすれ，子どもの身心の疲労や精神的不安定がデメリットとしてあげられていたのである。

しかし上述のような多数派の意見とは異なる考え方もみられており，夜間保育といってもその形態は様々であり，子どもはお泊り保育にかなりよく適応していて，お泊り保育がすぐに子どもに重大な影響を及ぼすとは云いきれなかったのである。

そこで５７年度は，三歳未満からの早期の委託保育や母親の就労の問題は，より長い期間で人間形成に及ぼす影響をみて行く必要があろうと考え，またより統制された子どもたちについて検討すべきであると考えたわけである。保育所が今日のように増加したのはこの２０年くらいの間のことで，また統計的にはこれまで保育所を利用してきたのは，経済的には低い階層に片寄る傾向にあったことが，これまでの調査によってもみられているのである。そのため家庭育児か保育所保育かを，条件を統制せずに比較することはできないと考えたわけである。

方　法

A調査：大学・短大生の成長過程における母親の就労状況とその考察

全国の大学および短大生１２１５名に対する質問紙調査

B調査：三才未満からの集団保育と家庭保育との統制的比較検討

三歳未満から集団保育を受けてきた幼児と三才以後に集団保育（幼稚園および保育所）に入ってきた幼児とその両親について，保育者および母親に評定を行ってもらった。保育者の評定は，幼児および家庭に関する３３項目の５段階評定である。その結果８園から２１６名の３才以上幼児の有効資料を得たが，その中から同じ園に在園し，同年齢，同性，家族構成やきょうだい関係および社会経済階層の似通った，条件を統制した三歳未満集団保育経験児と家庭保育児とをマッチングしてそれぞれ３４例計６８例（男３２，女３６）について比較検討した。

結果および考察

A調査：大学・短大生の成長過程における母親の就労状況とその考察

①対象学生の母親の，結婚前から今日に到る就労率はU字型をとって推移し，対象学生が生まれ学齢までの時期が最低となり，その時期働いていた者は２８.０％，時々働いていた７.１％となっていた。現在の就労率は働いている４６.５％，時々働

いている6.7％，すなわち両者を合計すると半数を越え，現在の大学生の母親では専業主婦の方が少数派となっていた。

→ 表Ⅰ　大学別・子どもの年齢段階別母親の就労率

②結婚後現在まで一貫して働き続けていた母親は対象者の22.4％，一貫して働いていなかった母親は37.5％，残りの40.1％はその時々で働いたりしていた者であった。

③大学によって母親の就労率にかなり違いがみられ，現時点で最も高率であったのは山梨大の70.0％，続いて東京成徳短大62.7％，東北大60.4％，お茶の水大51.8％の順となっており，低率は青学大29.4％，東京歯大31.6％，昭和大医学部34.3％，東京34.5％などであった。一般に地方大学や短大などで高率で，都会型大学や医歯系大学に低率である傾向がみられた。

また女子学生の母親の方が男子学生の母親よりも就労率が高いようであった。

④対象学生の父親の56.3％は大卒以上の学歴で，専・短大を含めると61.6％に及んでいた。母親の大卒以上は17.5％，専・短大を含め30.4％と父親の学歴の方が高い傾向にあり，父の学歴の高い大学では母の学歴も高い傾向がみられた。

短大や地方大学よりも都会型大学や医歯系学部に両親の高学歴傾向がみられ，医歯系学部では私立国立ともに70％以上の父親が大学卒以上の学歴であった。（東京歯大97.0％，東京医歯大80.0％，昭和大医79.2％，東大医72.1％）

父親の学歴の高い大学では母親の就労率は低い傾向がみられた。

⑤父親の職業は42.3％が会社員，17.2％が自営業，12.2％が専門職，9.8％が公務員の順になっていた。

短大や地方大学などに自営業の比率が高く，山梨大・お茶大・横国大・東大などでは教員の比率が高く，医歯系とくに私立医歯系大学では専門職の医師歯科医師が多いようであった。

⑥対象学生の43.4％が主として中小都市で育っており，ついで大都市36.5％，農村等田舎19.4％，外国0.7％となっていた。

地方大学では大都市育ちは少く，外国育ちはみられなかった。

外国育ちの多かったのは早大6.1％，東京歯大2.6％，昭和大（医）と東大0.9％の順であった。

大都市育ちの多かったのは東京医歯大62.1％，青学大50.0％，横国大47.4％，東大47.0％，日女大43.8％の順であった。

地方出身者の多い大学では母親の就労率が高いようであった。

⑦母親の現在の職種は自営業が最も多く29.9％，続いて会社員26.9％，技能職15.2％，パート12.1％，教員8.1％，公務員4.0％，専門職3.8％の順であった。

この職種が結婚前から子どもが大学生になるまでのそれぞれのライフステージでどのように変化したかをみたのが，表Ⅱである。

→ 表Ⅱ　子どもの年齢段階別母親の職種

教員・公務員・専門職・技能職は結婚によってやや実数が減っていたもののライフステージによる変化の少ない職種であった。自営業は結婚・出産・子どもの小学校入学などによって次第に増加していた職種で，会社員はU字型をとっており，パートはライフステージと共に増加していた。

⑧母親が就労時の育児方法として，母親以外に世話をしていた人があったのは，子どもが学齢前で働く母親の39.4％，小学生時代21.0％，中学時代11.2％，高校時代8.7％，大学時代6.0％と，子どもの成長と共に減少していた。最も多かったのは父方祖母，続いて母方祖母，単に祖母と書いた者を含めると，母以外で育児にあたっていた人としては⅔以上がおばあさんであった。

⑨大学生から母親に対して，主婦および母としての役割遂行状態と女性の就労への賛意とを11項目につき5段階評定して貰った結果，全体として最も高く評価されたのは“家族への思いやり”であって，“よくない”“全くよくない”と評価した者は3％に過ず，大変よい42.2％，良い34.7％と，76.9％は母親をこの点で良いと評価していた。

最も評価の低かったのは，“子どもの勉強をみる”であって，この項目は“よくない”19.9％，“全くよくない”18.4％とその合計は38.3％に及んでおり，大変よい6.4％，良い11.7％とその合計は18.1％に過なかったのである。この

項目は東北大，東京医歯大などいわゆる入学のむつかしいといわれる大学では，よくない・全くよくないの合計が，それぞれ50.1％，60％と高くなっており，女子の大学ではよくないという評価は低率傾向がみられた。

母親の“女性の就労への賛意”は，よくない5.4％，全くよくない2.2％，合計7.6％，大変よい21.2％，良い24.5％，合計45.7％となっていて，女性の就労への賛意は高いと思われた。

“総合的にあなたの育て方”を評定して貰った結果，全体としてよくない5.6％，全くよくない2.3％，合計7.9％，良い34.0％，大変よい23.6％，合計57.6％となっていた。お茶大は0で，女子大学生は男子学生よりも母親を高く評価しているようであった。

⑩父親に対する5段階評定は，いずれの項目についても母親に対する評価より低くなっていた。最も評価の高かったのは母親の場合と同様“家族への思いやり”であって，よくない4.2％，全くよくない2.3％，合計6.5％，大変よい30.5％，良い31.5％，合計62.0％となっていた。最も評価の低かったのも母親の場合と同様“子どもの勉強をみる”であって，よくない24.8％，全くよくない20.6％，合計45.4％，大変よい6.9％，良い12.2％，合計19.1％となっていた。“家事を手伝う”という項目も評定が低く，“総合物にあなたの育て方”では，よくない・全くよくないの合計が12.1％，良いと大変よいの合計が46.4％であった。

⑪母親の就労状況別の母親に対する評定は，働いていなかった母親に対する評定が，大体の項目において最も高くなっていた。“がまん強い”という項目は，ずっと働いていた母親が最も高く，時々働いていた，ずっと働いていなかったの順になっていた。

→ 表Ⅲ　母親の就労状況別，両親に対する評価“総合的なあなたの育て方”

⑫母親の就労状況別にみた父親に対する評価も，働いていなかった母親の場合が，大体の項目において父親が最も高く評価されていた。“家事を手伝う”という項目は，ずっと働いていた母親の場合の父親が最も高く評価され，時々働いていた母親，働いていなかった母親の場合の順に低くなっていた。

⑬大学生自身の女性の就労と育児についての考え方は，全体の傾向としては“育児期間を過ぎてから仕事をもつ”に賛成した者が46.2％と最も多く，“育児は祖父母にたのみ両立”は1.9％に過ぎなかった。

この質問は性差が顕著で，男子は“女性は家事・育児に専念する”を38.1％が支持し第1位であったが，女子はこの項目を30.9％が支持していたに過なかった。“育児期間がすぎてから仕事を持つ”は女子は1位で54.7％が支持していたが，男子の支持率は33.7％あった。

短大生は四年制女子に比し，育児と仕事との両立意欲が低く，東大・東京医歯大の女子学生では，“女性は結婚後家事育児に専念する”を支持した者はみられなかった。

⑭母親の就労状況によっても，学生の婦人労働と育児についての考え方に違いがみられ，“女性は結婚後家事育児に専念する”を支持したのは，専業主婦の母の子ども（学生）では40.7％，母親が時々働いていた者30.0％，母親がずっと働き続けていた者21.7％と，母親の共働きと学生の共働き志向との間には関連がみとめられた。

→ 表Ⅳ　母親の就労状況別・婦人労働についての考え方

B調査：三才未満からの集団保育と家庭保育との統制的比較検討

①三歳未満から集団保育を開始した幼児と，三歳以後に集団保育を開始した幼児とで，現在同じ園に在園している同年齢，同性，家族構成きょうだい関係，社会経済階層をマッチングした対象幼児は，茨城県幼稚園児36名，八王子保育園児32名，計68名であった。

→ 表Ⅴ　マッチングサンプリング対象児

②保育者に対象幼児およびその家庭に関する33項目につき5段階で評定をしてもらった結果，欠席や遅刻・健康状態・食欲・排泄の自立・園生活に始めからなじむ・性格の明るさ・言語発達・知的判断力・友達の人気・集団内での指導力・目立ちたがる・運動機能・多動・家であったことをよく話すなどの項目については，三歳未満集団保育

児群の方が家庭保育児群より，対象２園いずれにおいても高く評価されていた。

③食事のマナー・いたずらでない・おしゃべりでない・指しゃぶりをしない・子どもの世話が行届いている・母親の人柄があたたかい・教育ママ的でないといった項目については，家庭保育児群が三歳未満集団保育児群より高い評価をうけていた。

④体格・身のまわりのことができる・母親が迎えに来ると喜ぶ・母親の園に対する協力度・過保護・溺愛・家庭の円満度・気分の安定・保育者の指示に従う・友達に対するあたたかさ等については，三歳未満に集団保育か家庭保育かとは関係がみられなかった。

→ 表Ⅵ　三歳未満集団保育児と家庭保育児との比較

ま　と　め

乳幼児期の委託育児の発達に及ぼす影響を検討するため，A調査として，大学・短大生の成長過程における母親の就労状況とその考察，B調査として，三歳未満からの集団保育と家庭保育との統制的比較検討，の２つの調査を行った。

その結果，現在の大学生の母親の46.5％が働いており，時々働いている者6.7％を含めると，専業主婦の母親は今日では少数派になりつつあるともいえることが知られた。

大学生の両親に対する評価では，専業主婦の母親よりも高く評価されていた。父親についても同様の傾向が認められた。

婦人労働と育児についての考え方には，学生の母親の就労状況との関係が認められ，働いている母親を持つ学生は，女性の就労に支持的であった。男子よりも女子学生の方が共働き志向が強かった。短大生よりも四年制大学の女子学生の方が婦人の就労に支持的傾向が高かった。

母親が働いている場合，母親に代って子どもの世話をしていた人としては，⅔以上は祖母であったにかかわらず，祖父母に育児をたのんで共働きを両立することを支持した学生はごく少数しか認められなかった。

三歳未満に集団保育を受けたか家庭で育てられたかの条件以外をなるべく統制して，マッチングしたサンプルで比較検討した場合，三歳未満集団保育児は，欠席や遅刻，健康状態をはじめとして，集団生活への適応において家庭保育児よりも，保育者から高く評価された。

家庭保育児は食事のマナー，いたずらをしない，おしゃべりでない等，個人的適応の点で高く評価された。

現在の大学生でも，女性の就労と育児のあり方としては，育児期間は母親が子育てにあたることを高く支持していたのであるが，三歳未満からの集団保育の開始が，子どもの発達に決定的なマイナスになっているとは見なされなかった。しかし子どもはやはり家庭で家庭につくしてくれた母親を高く評価していたことからも，共働き育児にはきめの細かい家庭への配慮と努力が要求されることと思われる。

表Ⅰ　大学別・子どもの年齢段階別母親の就学率

（%）

年令段階 / 大学名	平均	結婚前		出産まで		就学前		小学校時代		中学校時代		高校時代		大学入学後		人数
		働いていた	時々働いていた	働いていた	時々働いていた	働いていた	時々働いていた	働いていた	時々働いていた	働いていた	時々働いていた	働いていた	時々働いていた	働いていた	時々働いていた	
桜美林短大	50.2	72.7	7.4	28.8	4.1	26.9	6.9	31.8	11.0	41.8	6.0	42.8	11.6	47.8	11.6	256
成徳短大	68.7	71.4	3.9	34.7	3.0	32.4	11.1	48.1	11.9	56.7	7.0	59.8	7.2	62.7	3.8	217
青山学院大	45.7	61.3	6.5	29.0	3.4	23.5	2.9	26.5	8.8	29.4	8.8	35.3	11.8	29.4	14.7	34
早稲田大	52.0	62.0	0.0	33.3	0.0	27.8	3.7	36.4	3.6	40.0	3.6	47.3	1.8	50.9	1.8	57
慶応大	43.9	61.1	5.6	25.9	3.7	27.6	5.2	21.1	8.8	29.3	5.2	32.8	6.9	36.8	3.5	59
日本女子大	47.8	64.8	10.4	37.1	4.0	27.2	4.8	33.6	8.8	39.2	5.6	40.0	7.2	43.9	8.1	125
東北大	45.1	37.0	14.8	27.6	3.4	32.3	0.0	37.5	9.4	43.8	6.3	50.0	3.1	60.4	3.7	32
東京大	44.1	56.6	10.6	27.5	1.8	22.5	13.5	31.0	12.4	32.2	7.0	33.6	7.8	34.5	11.2	120
山梨大	66.3	75.9	6.9	48.3	3.4	50.0	0.0	60.0	10.0	66.7	3.3	70.0	0.0	70.0	0.0	30
電通大	43.7	50.0	3.3	23.3	3.3	16.1	6.5	29.0	16.1	45.2	3.2	48.2	0.0	48.4	3.2	31
横国大	45.4	55.6	5.6	33.3	5.6	33.3	5.6	36.8	5.2	31.6	10.5	42.1	5.3	36.8	10.5	19
お茶の水女子大	53.4	62.5	10.7	37.0	7.4	29.1	10.9	33.9	14.3	42.9	3.6	48.2	3.6	51.8	5.4	56
東京医歯大	38.6	63.3	0.0	33.3	3.3	26.7	3.3	30.0	6.7	30.0	3.3	33.3	0.0	40.0	0.0	30
昭和大	34.7	40.0	8.0	23.3	2.9	26.7	4.8	27.6	4.8	28.6	1.9	32.7	2.9	34.3	3.8	109
東京歯大	33.7	44.7	10.5	27.0	2.7	24.3	2.7	27.0	2.7	29.7	0.0	32.4	0.0	31.6	0.0	40
平均	50.5	62.5	7.1	31.0	3.7	28.0	7.1	34.8	9.8	41.2	5.4	43.9	6.6	46.5	6.7	1215

表Ⅱ　子どもの年齢段階別　　母親の職種

人　数（%）

	働いていた人数	回答者人数	会社員	教　員	公務員	専門職	自営業	技能職	パート
母親が結婚前	801	614	293 (47.7)	81 (13.2)	47 (7.7)	18 (2.9)	79 (12.9)	87 (14.2)	9 (1.5)
母親が結婚後第1子出産まで	397	359	78 (21.7)	51 (14.2)	26 (7.2)	15 (4.2)	122 (34.0)	53 (14.8)	14 (3.9)
小学校入学まで	411	370	59 (15.9)	49 (13.2)	18 (4.9)	14 (3.8)	153 (41.4)	51 (13.8)	26 (7.0)
小学生時代	525	471	96 (20.4)	48 (10.2)	24 (5.1)	16 (3.4)	167 (35.5)	69 (14.6)	51 (10.8)
中学生時代	553	501	116 (23.2)	48 (9.6)	22 (4.4)	17 (3.4)	170 (33.9)	72 (14.4)	56 (11.2)
高校生時代	599	543	144 (26.5)	48 (8.8)	23 (4.2)	21 (3.9)	176 (32.4)	75 (13.8)	56 (10.3)
本人が大学入学後	629	579	156 (26.9)	47 (8.1)	23 (4.0)	22 (3.8)	173 (29.9)	88 (15.2)	70 (12.1)

表Ⅲ　母親の就労状況別，両親に対する評価
“総合的なあなたの育て方”

%

	母親の就労	大変よい	よ　い	ふつう	よくない	大変よくない
対母親	全　体	23.5	33.9	34.7	5.7	2.2
	働いていた	24.5	31.1	33.1	8.6	2.7
	時々働いていた	20.7	35.8	35.4	5.9	2.2
	働いていない	25.7	33.5	35.0	3.8	2.0
対父親	全　体	18.8	27.6	41.4	8.0	4.1
	働いていた	18.4	29.3	38.7	9.0	4.7
	時々働いていた	16.8	27.0	42.7	9.3	4.2
	働いていない	21.1	27.3	41.6	6.2	3.8

表Ⅳ　母親の就労状況別・婦人労働についての考え方

	保育所を充実して両立	保育所を利用して夫婦分担	祖父母に育児をたのみ両立	育児期間後に就労	女性は家事育児に専念	合計
ずっと働いていた母親の子ども	44 17.1	65 25.1	7 2.7	122 47.3	56 21.7	258人 100%
時々働いていた母親の子ども	70 21.9	37 11.6	9 2.8	171 53.4	96 30.0	320人 100%
専業主婦の子ども	45 8.8	70 13.8	5 1.0	182 35.8	207 40.7	509人 100%

表Ⅴ　マッチングサンプリング対照児

分類	性	茨城幼稚園	八王子保育園	計
三歳未満集団保育	男	8	8	16
	女	10	8	18
三歳未満家庭保育	男	8	8	16
	女	10	8	18
計		36	32	68

表Ⅵ　三歳未満集団保育児と家庭保育児との比較

5段階評定得点の平均

子どもの状態	三歳未満	茨城幼稚園	八王子保育園	計
欠席や遅刻	集団保育	3.8	4.0	4.0
	家庭保育	3.7	3.0	3.6
健康状態	集団 〃	4.2	4.2	4.2
	家庭 〃	3.8	3.5	3.7
食欲	集団 〃	3.7	3.1	3.4
	家庭 〃	2.7	2.6	2.7
排泄の自立	集団 〃	4.1	4.7	4.4
	家庭 〃	4.2	4.1	4.2
園生活に始めからなじむ	集団 〃	3.9	3.9	3.9
	家庭 〃	2.1	2.9	2.5
性格の明るさ	集団 〃	3.3	4.2	3.8
	家庭 〃	3.2	3.2	3.2
言語発達	集団 〃	3.5	4.3	3.9
	家庭 〃	2.9	3.4	3.1
知的判断力	集団 〃	3.3	3.8	3.6
	家庭 〃	2.6	2.8	2.7
友達の人気	集団 〃	2.9	3.7	3.3
	家庭 〃	2.8	3.2	3.0
集団内指導力	集団 〃	3.1	3.2	3.2
	家庭 〃	2.0	2.7	2.4
運動機能	集団 〃	3.5	3.6	3.6
	家庭 〃	2.9	2.9	2.9
食事のマナー	集団 〃	2.4	3.3	2.9
	家庭 〃	3.4	3.5	3.5
子どもの世話の行届きかた	集団 〃	3.0	3.7	3.4
	家庭 〃	3.6	3.8	3.7
母親の人柄のあたたかさ	集団 〃	3.2	3.7	3.5
	家庭 〃	3.7	3.7	3.7
教育ママではない	集団 〃	2.7	3.1	2.8
	家庭 〃	3.3	3.2	3.3
いたずらでない	集団 〃	2.8	2.1	2.5
	家庭 〃	4.2	3.2	3.7
おしゃべりでない	集団 〃	1.6	1.6	1.6
	家庭 〃	3.4	2.9	3.2
指しゃべりをしない	集団 〃	3.9	3.1	3.5
	家庭 〃	4.4	4.0	4.2

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

緒　言

55 年度には夜間保育という特殊な保育形態の実態を調査し,このような特殊は委託育児は子どもによくない影響があるのではないかを検討した。

56 年度には委託育児についての社会の認識や評価を調査した。

その結果社会一般の人々は,三歳未満児は家庭で母親によって世話されるのが好ましいと考え,母親が働いている場合でも家庭で祖父母その他によって育児が代替されることが好ましいと考えていることが知られたわけである。そして 3 才以上になったら,母親が働いている場合も含めて,保育所よりも幼稚園で教育を受けさせるのが好ましいと受けとめていたのである。三歳未満児の保育所保育は,母子の愛情的結合が稀薄になり,母親としての自覚がうすれ,子どもの身心の疲労や精神的不安定がデメリットとしてあげられていたのである。

しかし上述のような多数派の意見とは異なる考え方もみられており,夜間保育といってもその形態は様々であり,子どもはお泊り保育にかなりよく適応していて,お泊り保育がすぐに子どもに重大な影響を及ぼすとは云いきれなかったのである。

そこで 57 年度は,三歳未満からの早期の委託保育や母親の就労の問題は,より長い期間で人間形成に及ぼす影響をみて行く必要があろうと考え,またより統制された子どもたちについて検討すべきであると考えたわけである。保育所が今日のように増加したのはこの 20 年くらいの間のことで,また統計的にはこれまで保育所を利用してきたのは,経済的には低い階層に片寄る傾向にあったことが,これまでの調査によってもみられているのである。そのため家庭育児か保育所保育かを,条件を統制せずに比較することはできないと考えたわけである。